

25周年記念特別講演を開催して

米田 眞澄

本年度より、ディレクターを務めることとなりました。女性学インスティテュートは1985年4月に設立されました。そこで、9月30日に本学講堂において、「ジェンダー平等への課題」と題して、女性学インスティテュート設立25周年記念特別講演会を開催しました。200名以上の参加がありました。



米田眞澄氏

講演者として、シャムシア・アフマッド先生と堀内光子先生をお招きしました。シャムシア先生は、インドネシアからお越しくださいました。2001年から2004年まで国連の女性差別撤廃委員会の委員を務められた方です。堀内先生は、外務省国連日本政府代表部公使、ILO駐日代表などを歴任され、現在は文京学院大学特別招聘教授でいらっしゃいます。

女性学インスティテュートが設立された1985年、国会では男女雇用機会均等法が可決され、つづいて、女性差別撤廃条約が批准されました。したがって今年は、日本の女性差別撤廃条約批准25周年でもあります。昨年、同条約の進捗状況に関する日本の第6次報告書が委員会によって審査されたところです。

シャムシア先生は、委員として多くの国の男女平等の進展状況を審査されてきた経験から、とりわけ女性差別撤廃条約の履行を進める上での女性学および女性学インスティテュートが果たす役割の重要性を指摘されました。委員会による勧告に従って日本が女性を差別する法制度を改正し、男女共同参画計画の実施を確実なものとするために、男女間格差の原因を明らかにし、その解消のためにどのような行動が必要であるかについて、学際的な研究を行うべきであること、国の機関および市民社会が、女性の人権の確立に向けてジェンダーの主流化（あらゆる領域にジェンダーの視点を組み込むこと）を進めるように貢献をすべきであることが強調されました。

つづいて堀内先生は、日本では特に雇用と政治分野で男女間格差が顕著であることについてデータを示し

て解説されました。また、これらの分野での指導的地位を占める女性を増やすために、暫定的な特別措置を早急にとるように女性差別撤廃委員会から勧告を受けており、日本は、来年の夏までに委員会に、そのための数値目標とスケジュールを示すことが要請されていることにも言及されました。また、児童労働については、統計上は男児の方が多いが、女兒は家事使用人や子ども買春などの「隠された形態の児童労働」により多く従事させられていること、初等教育を受ける機会も女兒の方が少ないことを指摘されました。

参加者からは女性差別の定義を法律で定めることの必要性、非正規雇用の問題などについて意見や質問が出されました。講演会は、松縄順子教授の指導のもと、大学院同時通訳コースの学生たちにより同時通訳がなされ、また、学部生も学生実行委員として講演会の準備、運営に参加してくれました。これからも、女性学インスティテュートの所員、事務局の職員、そして学生と一緒にあって、知的刺激がいっぱいの講演会やセミナーなどを企画・開催していきたいと思っております。どうぞ、よろしくお願ひします。

(文学部准教授：国際法学)

連続セミナー「女性学の25年」を担当して

【第1回：2010年6月18日】……………別府恵子

●「やはり、ヴァージニア・ウルフはすごい！

—めぐりあう時の饗宴^{シンポジウム}—

女性を研究対象とする「新しい」学問、女性学は、リベラルアーツ全般に広く、深くかかわる学問体系といえるでしょう。ヴァージニア・ウルフの『わたしだけの部屋』(1929)は、イギリスで女性参政権が確立した1928年の10月、ケンブリッジの女子学寮でウルフがおこなった講演「女性と文学」をもとに出版された、20世紀に書かれた優れたフェミニスト評論書の一冊。このたびの連続セミナーは、じゅうらい、後景にあった女性を前景にクローズアップしたフェミニスト批評理論が英語圏文学研究とどうかかわってきたか、『わたしだけの部屋』を案内にふたたび考える機会となりました。そして、インスティテュート設立から2年後、

機関誌『女性学評論』が創刊された時を呼び戻してもくれました。

ウルフは「意識の流れ」を『ダロウェイ夫人』や『灯台へ』などに見事に作品化した作家として広く知られています。最近、『ダロウェイ夫人』(1925)が、マイケル・カニンガムに、過去、現在とめぐりあう時間を主人公にした『めぐりあう時間たち』(1997)を書かせためぐりあわせを想います。ひらかれた話し合いの場としての『女性学評論』が刻んできた「女性学の25年」、それぞれの時のめぐりあいに想いをはせることになりました。(神戸女学院大学名誉教授：英米文学)

【第2回：2010年6月25日】……………津上智実

●「女たちの文明開化

～本邦洋楽史とミッション・スクール」

第2回は「女たちの文明開化～本邦洋楽史とミッション・スクール～」と題して、近年見直しが進んでいる明治・大正期の女性音楽家たちを取り上げました。岩倉使節団と共に渡米して音楽を修めた瓜生繁子(1861-1928)、「上野の皇太后」と呼ばれた幸田延(1870-1946)、ヴァイオリンの安藤幸(1878-1963)、世界の蝶々さんとなった三浦環(1884-1946)、悲劇のピアニスト久野久子(1885-1925)、そして神戸女学院ゆかりのピアニスト小倉末子(1891-1944)について、生涯のあらましと近年の研究とを概観しました。

また、女子教育における音楽の位置づけについて、「官の視点」とミッション・スクールの考え方を対比的に取り上げ、後者の例としてルイーズ・ピアソン(1832-1899)の言葉「音楽は感情の自然な伝達の手段である。女性は音楽によって心の感動を表現すべきである」を紹介しました。

今日、私たちの身の回りで当たり前のように鳴り響いている様々な音楽や楽器が、ほんの100年前にはまだまだ珍しいものであり、弾ける人も限られていたという歴史的な事実と、そこで先駆的な女性たちの活躍があったことを改めて認識して頂ければと思います。

(神戸女学院大学音楽学部教授：音楽学)

【第3回：2010年7月2日】……………飯田祐子

●「フェミニズムの展開・文学研究の場合」

日本近代文学研究におけるフェミニズム批評の25年を振り返り、その変化についてお話しさせていただいた。具体的には、円地文子『女坂』(1957年)を論じたものを四編選んでみた。

はじめに、男性中心的な読みの代表とされる江藤淳の論『女坂』に女のエロスを読む論である。次に、これを批判した第二波フェミニズムの批評を。主人公倫を女性の代表と位置づけ、女性の主体化や女性の伝統の発見を読んだ。それから次の展開として、女性間の差異に目を向け円地文子の特殊性を限界として読む論を紹介し、最後に限界に対しても批判的ではない最近の研究を。世代の違いに目を向け、主人公の主体化が読めなくとも、問題が受け継がれていくことが評価されている。作品の顔は時代とともに変わっている。フェミニズム批評が、「女」を一つのカテゴリーとして発見しその主体化を謳うものから、差異に目を向けること、また容易に主体化し得ない状況をも否定せず、ゆるやかな連帯を見出すことへと動いてきていることを辿ってみた。会場からは、扱った作品が古かったので、新しい視点で書かれた作品は出ているのかというご質問をもらった。もちろん、あります。機会があれば、今度は現代の作品を中心に話してみたいと思う。

(神戸女学院大学文学部教授：日本近代文学)

【第4回：2010年7月9日】……………森永康子

●「ジェンダーの心理学：フェミニズムと心理学研究」

セミナーでは、1960年代以降のフェミニズムが心理学に与えた影響について、「女／男らしさ」「男女の役割」がどのように考えられ研究されてきたかという点から紹介しました。フェミニズムの功績のひとつは、「ジェンダーの視点」を明らかにしたことだろうと思います。この視点によって、我々がいかに「女／男らしさ」「男女の役割」に縛られているのかを考えることができ、心理学でもそれを確かめるような研究が行われるようになりました。ジェンダーはまさに「世の中を理解するときの色眼鏡」で「行動するときの脚本」です。ジェンダーの色眼鏡をかけ、ジェンダーの脚本にしたがって行動している自分に気づくことは、「ジェンダーの視点」がなければ難しいでしょう。そして何より、この視点は、世の中に氾濫している男女の違いについての「科学的な言説」を読み解く手がかりのひとつにもなるはずで。男女の差異が生得的なものであろうと社会的なものであろうと、私を含めて多くの人が、ジェンダーの縛りからはずれて、少しでも「自分らしく」生きていける社会になればいいなあと考えております。セミナーにご出席くださったみなさま、どうもありがとうございました。

(神戸女学院大学人間科学部教授：生涯発達心理学)

The Art of Friendship

中村昌弘

哺乳類の個体では受精時に決定された染色体の組み合わせに基づき性分化した生殖腺から分泌される性ホルモンによって性差が構築される。この性差無くして有性生殖はあり得ない。これは自然選択や性淘汰という進化の仕組みによる必然であり、そのお陰でヒトの多様性も保たれる。しかし性染色体の組み合わせと内・外生殖器の機能・形態が必ずしも一致しない例から明らかのように、生物学的な性ですら二元論的世界観には収まりきれない。そんな生物学的な性を下敷きに、性自認・性指向という内的な性と、法的・社会的な性という外的な性をわれわれは同時に生きている。ヒトや人の性に変数が多数あるのだから、その態様を二つに還元できるはずがないことは理性的には明らかだ。しかしわれわれの脳は複雑な対象を複雑なまま理解するのが得意でない。だから、ある特徴を理論や証拠に非依存的に人にあてはめてしまう強い傾向を脳は持っている。これが固定観念と偏見の生物学的基盤なのかも知れない。そういう脳が政治経済的社會という文脈に埋め込まれ、男らしさのドミナントストーリーとしての立身出世や女らしさのそれとしての良妻賢母などが生まれてきたのかも知れない。そしてそれらを背景として、汚女子、肉食女子、草食男子、弁当男子といったオルタナティブストーリーも生まれてくる。

万物の霊長にしては些か短絡的にラベルを人に貼るのが脳なら、喜怒哀楽の経験を日々生きているのもまた脳である。そして、脳は人がその属性の総和より大きいことを知識として知っている。性別に留まらず、国籍、人種、学歴、年齢その他の属性に還元できないその人らしさは、「生きられた経験」の記憶が時間を縦糸に紡がれて生まれる一人ひとりのストーリーの中にこそあることを知っている。であるならば、知を実践にうつし、そんな物語の共有を試みてはどうだろう。そこにより豊かなポリフォニーが生まれるかも知れない。そうならば世界がより心地よくなるかも知れない。物語の響き合いを聞くために、老若男女病める者も健康な者もみな互いに物語を聴き合う。それを the art of friendship と呼んでみてはどうだろう。

(文学部専任講師：会議通訳)

初めての女子大に赴任して思うこと

須藤春佳

4月から本学に赴任したが、初めての女子学生のみ学び舎での教員生活は新鮮で、改めて女性のもつ資質に思いをめぐらせる機会が増えたように思う。

女性同士の社会には、非言語的にわかりあえる感覚があり、彼女達は場の空気を察したり、相手が何を求めているかをはかり、一人飛び出ぬよう心がける協調的傾向も強い。ゼミでも、自ら意見を言う人がなかなか出なくて順番にきいていくことが多い。彼女たちは当てられると自分の感じ、考えていることを発言するのだが、自ら言い出しにくいようだ。これらは波風を立てずに人間関係を維持する上では重要なことであろうが、一方で人とぶつかり、自身を表現することも大事ではないかと思う。

学生たちは、知識を素直に受け取る力はあるが、それを受けて自分で考えるところに至らない印象もある。このような傾向は、大学院の臨床心理士養成課程においても感じることで、院生たちには相手の話に耳を傾け、感じ取る力は大いにあるので、感じたことを言葉にして伝えたり、なぜそう感じるのかについて考えることを大いに期待したい。

心理学分野には、女性が男性に比べ「共感力が高い」、「人の意見を吸収する傾向が強い」という知見がある。臨床心理学的な思考を習得するには、自ら体験し、相手と接する中で感じる臨床感覚に開かれることが重要である。この分野は女性の共感力の高さを生かしうる領域であると思われるが、感じる力を磨いて専門職人となる上では、感じたことを理解し人に伝える力が求められる。

なお、共感力の高さ、相手の思いを感じる力は、専門職人としてのみならず、人と関わり生きていく上で根本的に重要な資質である。また、相手と渡り合っていく上では、相手の思いを受けて反応するのみでなく、人の意見を一旦自分の中に入れて考え、自分が感じ、考えたことを、自らの言葉で伝えることも重要であろう。彼女たちが自分の感覚を信頼し、それを人に伝えて、他者と共有できるものとするところこそ、自らの資質を発揮できるのではないか。

以上、赴任直後に私が学生たちに対して感じたことであるが、この先どう変遷していくのか、楽しみだ。

(人間科学部専任講師：臨床心理学)

2010年度前期活動報告

特別講演会

2010年5月28日(金) 10:35~11:25

「食卓から見える女性の変化」



阿古真理氏

会場：神戸女学院講堂
 講師：阿古 真理氏
 (ノンフィクションライター・
 生活史研究家・
 神戸女学院大学卒業生)
 出席者：約120名

連続セミナー「女性学の25年」

会場：神戸女学院大学ジュリア・グッドレー館104教室

<第1回> 2010年6月18日(金) 14:00~15:30

「やはり、ヴァージニア・ウルフはすごい！」

講師：別府 恵子氏

(神戸女学院大学名誉教授：英米文学)

<第2回> 2010年6月25日(金) 14:00~15:30

「女たちの文明開化

～本邦洋楽史とミッション・スクール」

講師：津上 智実氏

(神戸女学院大学音楽学部教授：音楽学)



別府恵子氏



津上智実氏

<第3回> 2010年7月2日(金) 14:00~15:30

「フェミニズムの展開・文学研究の場合」

講師：飯田 祐子氏

(神戸女学院大学文学部教授：日本近代文学)

<第4回> 2010年7月9日(金) 14:00~15:30

「ジェンダーの心理学：フェミニズムと心理学研究」

講師：森永 康子氏

(神戸女学院大学人間科学部教授：生涯発達心理学)

[受講者：45名、平均出席者：33名(73.9%：当日参加者を含む)、修了証交付者：30名]



飯田祐子氏

森永康子氏

女性学インスティテュート設立25周年記念特別講演会

2010年9月30日(木) 16:40~18:10

(同時通訳付き)

「ジェンダー平等への課題」

会場：神戸女学院講堂

講師：シャムシア・アフマッド氏

(インドネシア出身の元女性差別撤廃委員会委員・
 元インドネシア共和国女性問題担当副大臣)

堀内 光子氏

(文京学院大学特別招聘教授・前ILO駐日代表・
 児童労働ネットワーク代表)

出席者：200名超

2010年度後期講演会等のご案内

■学外講演会

会場：西宮市大学交流センター

(ACTA西宮 東館6階) ※阪急西宮北口下車すぐ

(第1回) 2010年10月13日(水) 10:30~12:00

「沖縄駐留米軍基地、並びに普天間基地移設をめぐる法律上の論点」

講師：Shawn Banasick 氏

(神戸女学院大学文学部准教授：国際関係論)

*同時通訳付のため、申込制(定員30名)

(第2回) 2010年11月10日(水) 10:30~12:00

「アメリカに長く住むと日本人はどう変わるのか
 ～文化変容のプロセスを踏まえた自己変革の考察～」

講師：出口 真紀子氏

(神戸女学院大学文学部准教授：文化心理学)

2010年度女性学インスティテュート編集委員

飯田祐子、井上紀子、津上智実、米田真澄(委員長)

編集事務：東かおり、吉永真理子(ABC順)

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>